# The Role of Ever in Inversive Exclamatives


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-07-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 河野, 武<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3889 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 倒置感嘆文における ever の位置づけ

河　野　　武

## 0．序論

英語の「倒置感嘆文」は，次の例のように，肯定形と否定形をもつ。

(1) Is he mad!
(2) Isn't he mad!

しかし，この種の感嘆文は共に 'He is so mad' のような命題内容をもち，次のようなプロトタイプ感嘆文（すなわち how/what を伴う感嘆文）に対応する（Quirk et al. 1985: 825 参照）。

(3) How mad he is!

倒置感嘆文は対応する yes-no 疑問文と統語的・意味的に異なるとする見方（McCawley 1973; Fillmore 1998 等）と，統語的・意味的には共に疑問文であり「質問」を表すが，最終的な発語内行為においては〈感嘆〉と〈質問〉に分かれるとする見方（Hudson 1975; Bolinger 1989; Wierzbicka 1991; Huddleston 1993; Goldberg and Giudice 2005; 河野 2007，2008 等）がある。両者の重要な統語的相違として，二種類の ever との共起の違い，及び否定辞との共起の違いがあることが McCawley（1973）によって観察されている。

(4) a. Is syntax ever easy? (ever=at any time)
　　b. Is syntax ever easy! (ever=really and truly)
(5) a. Isn't syntax easy?
　　b. *Boy, isn't syntax easy! (=Syntax isn't easy at all.)

(4a)の疑問文には「時間」の ever（以下 TE と略記）は現れうるが「非時間」

(ないしは「強意」) の ever (以下 NTE と略記) は現れえない。逆に,(4b)の感嘆文には NTE は現れうるが TE は現れえない。また,(5a)のような否定疑問文は許容されるが,(5b)のような否定感嘆文は括弧内に示したような否定命題を表す文としては許容されない。もちろん肯定の「感嘆的主張」(exclamatory assertion) の読みでは許容される。また,倒置感嘆文は,次の例のように,否定が狭い作用域を持つ場合は許容されることが Huddleston (1993) によって指摘されている。

(6) Boy, am I ever not hungry!

本論では,倒置感嘆文において NTE は意味的にどのように規定すべきか,またこの NTE は倒置感嘆文において否定とどのように相互作用するか,さらにこの NTE の表す「強意」は wh 疑問文の場合とどのように対応づけられるかについて考察する。

## 1. 倒置感嘆文における NTE の認可

倒置感嘆文において NTE を認可している要因は何であろうか。さしあたって次の例を比較してみたい (河野 2007, 2008 参照)。

(7) a. Am I ever happy!
b. *I'm ever happy!

例から明らかなように,(7a)のような倒置感嘆文においては NTE は自然に用いられるが,(7b)のような平叙文をベースにした感嘆文では調和しない。さて,感嘆の発語内行為(すなわち主観的な感情表出)を共有する(7a)と(7b)の間で,(7a)にのみ NTE が現れうるとすれば,(7a)には NTE を認可する統語的特性が内在しているとしなければならない。ここに関与しているのは「疑問」の要素であろう。(7a)の NTE は TE と同様に否定極性項目であり,否定や疑問などの「対比想定をもつ文脈,すなわち否定の認知構造」(吉村 1998) でのみ認可されるものと思われる。このことは,倒置感嘆文が疑問文を基底にもつ感嘆文であるとみなすことによって自然に説明される (Hudson 1975; Bolinger 1989; Wierzbicka 1991; Huddleston 1993; Goldberg and Giudice 2005

参照)。もちろん，ここでの疑問は，通常の yes-no 疑問文のように命題（that I'm (so) happy）の真偽性判断を聞き手に問うものではない。ここでは，むしろ，命題の真偽性は問うまでもなく明らかなことを伝えるための，本来話し手自身に向けられた質問である（Sadoc and Zwicky 1985; Michaelis and Lambrecht 1996; Michaelis 2001; Zanuttini and Portner 2003 参照)。

倒置感嘆文における NTE のステイタスを検討するに先立って，肯定・否定倒置感嘆文の一般的な規定を行っておきたい。別の例を挙げておく。

(8) a. Is he mad!
b. Isn't he mad!

上で素描した見方に沿って，倒置感嘆文は基底に話し手自身に宛てた問いをもつとしよう。さらに，その問いに対する話し手自身の答えが含意されているとしよう。こうして，上の一対の倒置感嘆文は次のように定式化される(河野 2007: 73 参照)。

(9) a. i) Self-addressed question: <Is it the case that he is (so) mad?>
ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>
b. i) Self-addressed question: <Isn't it the case that he is (so) mad?>
ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>

自問部分については，肯定的な答えを引き出そうとする誘発的態度が伴うか否かで否定倒置感嘆文(9b)と肯定倒置感嘆文(9a)の差が生ずる。しかし，自答部分は共に命題内容を肯定するものであり，差はない。要するに，異なるモードであえて自分自身に問いかける風を装い，結局は答えは問うまでもなく明らかなことを強意的に提示する発話の方略であると言える。なお，誘発的態度は話し手の自問自答のなかで作用するものではあるが，誘発的質問の論拠となるべき，聞き手との何らかの共有化された（ないしは共有化されているとみなしうる）想定を必要とする。従って，例えば(9b)では命題内容の 'that he is (so) mad' が相手と文脈的に共有されていることが重要である。一方，(9a)では命題内容は聞き手にとって唐突で新奇なものであってもさしつかえない。

## 2．倒置感嘆文におけるNTEと真偽性判断

さて，一般的に肯定･否定倒置感嘆文が(9)のように規定されるとして，これらに現れるNTEはどのように特徴づけるべきであろうか。(8)と関連づけた次の例を検討してみたい。

(10) a. Is he ever mad!
b. Isn't he ever mad![1]

基底における倒置感嘆文の意味表示でNTEが生起する可能性は二つある。一つは命題を表す下位節であり，いま一つは命題の真偽性判断を表す上位節である。以下の議論で次第に明らかになるように，NTEは命題の真偽性判断に関わるとするのが適切であると思われる。すなわち，次のような意味表示を措定するのである。

(11) a. <Is it ever the case that he is (so) mad?>
b. <Isn't it ever the case that he is (so) mad?>

上の意味表示においては，命題が真となる場合があるか否かを問う形を取る。これは非特定時に命題が真であったか，真であるか，あるいは真になると予測されるかを問うこととは異なる。後者はむしろ次のように表示される。

(12) a. <Is it the case that he is ever mad?>
b. <Isn't it the case that he is ever mad?>

しかし，ここでのeverは疑いなくTEであってNTEではない。さらに言えば，(11)は倒置感嘆文の意味表示ではなく，むしろ次のような正真正銘の(〈質問〉の発語内行為を表す)疑問文の規定であるとみなすべきものである。

(13) a. Is he ever mad?

b. Isn't he ever mad?

上のような純粋な疑問文は，修辞疑問文のような特殊な場合を除いて，聞き手から特定時（ないしは特定可能な時）における命題の真偽性に関わる答えを要求する。これとは対照的に，倒置感嘆文に伴う質問は自分宛の問いであって，命題が発話場面において真であることを伝える内的な自答で解決されるものである。答えが話し手と聞き手の双方にとって自明な質問をあえて掲げるのが倒置感嘆文の常套手段であることを今一度想起しておきたい。

倒置感嘆文の NTE が真偽性判断にどのように作用するのかさらに検討してみたい。上の議論で，倒置感嘆文の真偽性判断は命題が真となる場合があるか否かを問う形を取ると述べた。ここで，「場合」は時間，場所，現実・非現実を含む広い概念であることに注意したい。つまり，NTE は考えられうるあらゆる世界（すなわち「場合」）において，命題が真となることがあるか否かを問うていると言える。これは明らかに誇張である。話し手は命題が真となる状況は一般に得られにくいと予測ないしは想定している。ところが予測に反して新奇な瞠目すべき事態が目の前で起こっている。そこで，思わず「そんなことがそもそも起こりうるのか」と感嘆の問いを発しているのである。

NTE は，このようにして，「信じ難さ」や「驚き」を表す標識であり，感嘆文に共通する「感情的スタンスの主張」('Assertion of Affective Stance' (Michaelis and Lambrecht 1996))の一形式であるとみなせる。比較のために，次のようなプロトタイプ感嘆文における感情的スタンスの表現を見ておきたい（Michaelis and Lambrecht 1996: 375-376; Zanuttini and Portner 2003: 47 参照）。

(14) a. I'm amazed at how much time it took.
b. It's amazing how much time it took.
c. You wouldn't believe how much time it took.

主節が感情的スタンスを表しており，埋め込まれた感嘆文に「驚き」や「信じ難さ」などの発話態度を添加している。ただ，プロトタイプ感嘆文と違って，倒置感嘆文は埋め込みが極めて厳しく制限されており，感情的スタンス

の指標となる主節と共起できない。以下を参照されたい。

(15) a. *I'm amazed whether he is mad.
b. *It's amazing whether he is mad.
c. *You wouldn't believe whether he is mad.
(16) a. *I'm amazed that boy, is he mad.
b. *It's amazing that boy, is he mad.
c. *You wouldn't believe that boy, is he mad.

倒置感嘆文は基底では疑問文であるが，(15)のように補文標識 whether を伴う間接疑問文の形を取りえない。これは，一つには，非感嘆的な疑問文と見分けがつかなくなることを避けるためであろう。一方，基底の語順をとどめた補文標識 that を伴う形は，次のように埋め込み文として許される場合があるが，(16)のような感情的スタンスの主節の下での埋め込みは許容されない。

(17) I knew that boy/* $\phi$, were we in for it! (Green 1976: 394)

倒置感嘆文はプロトタイプ感嘆文のように感嘆文としての独自の文形式をもたないので，基底の疑問文の形式を極力そのままストレートに表出することが好まれるものと解釈される。内省してみれば，疑問文そのものが話し手の「信じ難さ」や「驚き」を表明する役割を担っており，感嘆文に必須な感情的スタンスの標識はそれによって十分満たされていることが分かる。なお，倒置感嘆文はしばしば boy，wow，God などの間投詞で導入される。これらの間投詞も感情的スタンスの別種の指標をなす。これらの間投詞は感嘆文とは共起するが，基本的に〈質問〉の発語内行為を表す疑問文とは共起しないので，倒置感嘆文の導入として極めて有効な手段となる[2]。

倒置感嘆文の NTE に匹敵する，命題の真偽性判断に関わる ever は「推定」(putative) の should 節にも生起する。

(18) It's odd that he should ever notice it. (Quirk et al. 1985: 784)

この発話の趣意は，問題の事態がどのような状況下においても起こりえそう

にないと想定されるのに事実起こっていることへの不可解さの表明にある。ここでは,「推定」の should 自体が「驚き」や「信じ難さ」,あるいは「怒り」等の心的態度を表しており,命題態度に主観的要素を付け加えている。これだけでも出来事への話し手の主観的な反応はすでに表出されていると言えるが,NTE の付加によって心的態度はいっそう増幅されることが感じ取れる。(18)の補文を命題と命題態度に分けて表示してみれば次のようになる。

(19) It's odd [that it should ever be the case [that he noticed it]]

ここでの命題 'that he noticed it' は事実であり,命題態度は中立的な真偽性判断ではなく,should と ever の作用で主観的に濃厚に色づけされている。この主観的命題態度のおかげで,(18)は感嘆文と極めて接近する。事実,次の文は紛れもない感嘆的発話である(Quirk et al. 1985: 784 参照)。

(20) That he should ever notice it!

(18)の主節 it's odd も(14)の it's amazing 等とほぼ同様に感情的スタンスの標識とみなしうるので,これを削除して補文を実質的に主文に格上げすることで平叙文の形をとった感嘆文が生成される結果になっている。

### 3. 倒置感嘆文における NTE と否定辞との関わり

倒置感嘆文内での NTE と否定辞との関わりについてはすでに(10b)と(6)で議論したが,もう少し詳細に検討してみたい。まず確認しておきたいのは,倒置感嘆文における NTE は否定・肯定に関わりなく,(11a)・(11b)に示すように真偽性判断を表す主節を修飾することである。一方で,(6)が示すように,倒置感嘆文においては否定が広い作用域を持つ場合は排除されるが,狭い作用域を持つ場合は許容される。このことを踏まえて,次の例を比較してみたい。

(21) a. Isn't he ever mad!
b. Is he ever not mad!

(21a)は結果的に 'He's so mad' という発話内容を伝えるものであり，(21b)は 'He isn't so mad' の意を伝えるものである。すでに述べたように，(21a)の意味表示は(11b)((22a)として再掲) であるが，(21b)は(22b)のように表示される。

(22) a. <Isn't it ever the case that he is mad?>
b. <Is it ever the case that he is not mad?>

(22a)の否定は主節と補文に及ぶ。一方，(22b)の否定は補文内の mad を限定する構成素否定（すなわちほぼ calm と同義）となっている。いずれにせよ，NTE は第一義的に主節の疑問形によって認可されていることが分かる。NTE は，(22a)ではさらに同一節内の否定の作用を受けるが，(22b)では下位節にある否定の影響を受けない。このことは表層における NTE と否定辞の線的配列の前後関係で判別出来る。こうして，倒置感嘆文に生起する ever は埋め込まれた命題内容には関与することはなく，常に真偽性判断とのみ関わる。このことを確認するために，あえて ever の否定形である never が命題に含まれる可能性を検討しておきたい。

(23) *Is he never mad!
(24) <Is it the case that he is never mad?>

(24)は(23)の意味表示であるが，(23)は倒置感嘆文としては不適格となる。(23)においては，never は命題内容の構成素を成しており，「時間」ないしは「場合」を表しているものと解釈できる。しかし，この読みは（否定の作用もあって）倒置感嘆文では許容されない。一方，本論の主張のように，倒置感嘆文における NTE が実際に命題態度とのみ関わるのであれば，NTE は「時間」の枠に拘束される必要はなくなる。「時間」のカテゴリーは「場合」のカテゴリーにメトニミー的に拡張されてさしつかえない。事実そのほうが NTE の果たす強意的役割に適しているとも言える。

さて，(21b)では NTE に支えられて否定が狭い作用域をもつことが明確にされたが，NTE を除去するとどうなるであろうか。

(25) *Is he not mad!

これは明らかに容認されない発話である。それは一義的に否定が狭い作用域の読みをもつことが保証されなくなるためであると思われる。(そもそも否定が狭い作用域をもつ倒置感嘆文は一般的ではない。)否定が広い作用域をもつことに起因する(25)の不適切性は次のプロトタイプ感嘆文と同等である[3]。

(26) *How mad he isn't!

形態・統語論的に言えば,(25)は否定倒置感嘆文 Isn't he mad! の変異形と考えうるが,否定辞縮約を伴わない(25)は容認されない。否定倒置感嘆文では基底の否定疑問文が明示され,'He is so mad' の答え(自答)が誘発されるので,最適な発話形式になっていると言える。

今までの議論で,NTE は主節にのみ生起し,補文においては「時間」の ever が阻止されることが明らかになったが,ここで補文の性質についてもう少し考察しておきたい。命題を表す補文の満たすべき条件として,感嘆の対象となる指示物の同定可能性がある。

(27) a. Are $\phi$/*some/*any Swedes industrious! (McCawley 1973: 373)
b. Does Monica/that girl love Jerry! (ibid.)

これらの倒置感嘆文においては,主語名詞句が定か総称的であれば問題はないが,不定であると奇妙さを生じる。ただし,不定名詞句が一律に排除されるわけではない。

(28) a. Boy, does someone love Jerry! (ibid.)
b. Won't she make someone/*anyone a good wife?
(Hudson 1975: 14)[4]

(28a)の someone は不定ではあるが特定的である。他方,(28b)の対応形は非特定的であるが,肯定形は許されるものの否定形は許されない。(28b)は 'Won't she be a potential good wife?' の意を伝えるものであり,wife の意味が

関係的な語彙項目である「伴侶」someone を要求したためであると思われる[5]。さらには，感嘆の対象となっている属性の「良妻」が未来に証明される事柄であることとも関係しているであろう。ここで注意しておきたいのは，指示物の同定可能性は倒置感嘆文の命題が満たすべき独自の要件であって，主節の与える疑問の環境は関与しないことである。倒置感嘆文の命題は聞き手と共有する（ないしは共有しうると判断される）事態を記述するものであるから，特殊な要因が働いている場合は別として，問題となる指示物が定まっていることが前提になるのは当然である。

## 4．NTE の強意的役割

すでに述べたように，倒置感嘆文に伴う NTE は，問題の事態がどのような状況下においても起こりえそうにないと想定されるのに事実起こっていることへの不可解さの表明に関与するものであり，「驚き」や「信じ難さ」等の心的態度を表すものであった。このような心的態度の下では，命題がどのような場合に真となるかをあえて問うことと命題がそもそも本当に真であるか否かを問うこととの間にはさほどの開きはないと見てよい。次の例を見てみたい。

(29) a. Is it really the case that he is mad?
b. Is it in fact the case that he is mad?
c. Is it indeed the case that he is mad?

例文中の really/in fact/indeed は事実性を表す強意副詞であり，NTE もこれらの強意副詞によって近似的にパラフレーズできることから，NTE も強意副詞の一種とみなすこともできる。

上の議論と関連して，紛れもなく強意副詞に特化したとみなされている NTE について検討しておきたい。Wh 疑問文における疑問詞の強意のための NTE である。

(30) a. Who ever/Whoever told you that?
b. How ever/However did you manage it?
c. Where ever/Wherever have you been?

例文が示すように,強意の NTE はたいてい疑問詞とは分離された形と複合化された形とをもつが，見かけ上の差異にもかかわらず，次のような意味表示をもつと考えられる。

(31) a. For what X was it ever the case that X told you that?
b. For what X was it ever the case that you managed it in way X?
c. For what X was it ever the case that you have been to place X?

つまり，これらの問いは，考えられうるどのような場合において変項 wh のどのような値が命題を真にするかを求めている。NTE は命題が真となる変項の値を指定することは困難であると想定している。平たく言えば，例えば(31a)では，そのようなことを聞き手に言った人物は想定しにくいが，一体どのような人物がそのようなことをしたのかを問うている。(31b)，(31c)も，同様に，想定が立ちにくい「仕方」や「場所」の同定を表す。この場合の問いは，正面切っての質問であるばかりではなく，困惑や非難の表明に過ぎないこともありうる。いずれにせよ，これらの NTE は一見 wh を直接限定しているように見えるが，より正確には変項のどのような値が命題を真にするかを尋ねる質問，すなわち真偽性判断を求める質問となっている。これらの質問は正真正銘の wh 疑問文であって倒置感嘆文の質問とは機能を異にするが，NTE が命題の真偽性判断に関わる点ではまったく並行的であることは注目すべき事実であると言わなければならない。NTE に帰される「強意」は，真偽性判断に関わる ever の総体的なコンテクスト効果に他ならない。

## 5．結論

本論では次のようなことが明らかにされた。第一に，倒置感嘆文の NTE は真偽性判断に関わり，事態への「信じ難さ」や「驚き」の感情を添えつつ，考えられうるあらゆる世界において命題が真となることがあるか否かを問うものである。第二に，倒置感嘆文における NTE は第一義的に主節の疑問形によって認可されるが，さらに主節の否定辞の作用は受けるが，下位節の命題に含まれる否定辞の影響を受けない。第三に，倒置感嘆文における NTE の総体的なコンテクスト効果としての「強意」は，Wh 疑問文における疑問

詞の強意と軌を一にするものであり，共に命題の真偽性判断に関わる。

## 注

1 否定倒置感嘆文の容認可能性にはばらつきが見られる。Ronald Thornton 氏に依れば，(10b)は不可である。その理由は，基底の否定疑問文が肯定的バイアスを持っているため非主張的なNTEとなじみにくいのかもしれない。一方で，Huddleston (1993: 267) は，次のような省略的返答における使用を例示している。

i) A: He talks a lot of nonsense!
B: Doesn't he ever!

しかし，もし省略を伴わない形式である Doesn't he ever talk a lot of nonsense/do so! の方が容認可能性が落ちるとすると，iB はむしろ感嘆的付加語句であるとみなした方がよいかもしれない。すなわち，仮に次のような基底の発話の付加語句のみが顕在化したと考えるのである（Huddleston and Pullum 2002: 922 も参照)。

ii) He talks a lot of nonsense, doesn't he ever!

2 Huddleston (1993: 263) に依れば，これらの間投詞は語用論的に適切な内容と文脈を備えていれば疑問文とも共起しうる。

Gee, is this all for me?

答えがそうであると信ずる十分な根拠がある場合である。

3 プロトタイプ感嘆文においては，否定が狭い作用域をもつ場合でも許容されない。

*How not mad he is!

How と not は同じ文法的位置を占めるので相互排除的である。

4 Hudson (1975) では，倒置感嘆文の句読点は疑問符になっていることに注意したい。

5 特定性は，主語名詞句に比べて述部内の名詞句の方が制限が緩くなる場合があるのかもしれない。

## 参考文献

Bolinger, D. 1989. Intonation and its uses. Stanford: Stanford University Press.

Fillmore, C. 1998. Inversion and construction inheritance. In Webelhuth, G., J-P. Koenig, and A. Kathol, eds., Lexical and constructional aspects of linguistic explanation, 113-128. Stanford: Stanford University Press.

Goldberg, A. and A. del Giudice. 2005. Subject-auxiliary inversion: a natural category.

The Linguistic Review 22, 411-428.

Green, G. 1976. Main clause phenomena in subordinate clauses. Language 52, 382-397.

Huddleston, R. 1993. On exclamatory-inversion in English. Lingua 90, 259-269.

Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. The Cambridge grammar of the English language. Cambridge: Cambridge University Press.

Hudson, R. A. 1975. The meaning of questions. Language 51, 1-37.

河野　武　2007.「倒置感嘆文のモダリティ」,『大妻レヴュー』第 40 号，69-81.

河野　武　2008.「倒置感嘆文のモダリティ（続き）」,『大妻レヴュー』第 41 号，31-42.

McCawley, N. A. 1973. Boy! Is syntax easy! In Corum, C., T. C. Smith-Stark, and A. Weiser, eds., Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 369-377.

Michaelis, L. A. 2001. Exclamative constructions. In Haspelmath, M., E. Konig, W. Oesterreicher, and W. Raible, eds., Language typologgy and language universals, 1038-1050. Berlin: de Gruyter.

Michaelis, L. A. and K. Lambrecht. 1996. The exclamative sentence type in English. In Goldberg, A. E., ed., Conceptual structure, discourse and language, 375-389. Stanford: Center for the Study of Language and Information Publications.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.

Sadoc, J.M. and A.M. Zwicky. 1985. Speech act distinctions in syntax. In Shopen, T., ed., Language typology and syntactic description, 155-196. Cambridge: Cambridge University Press.

Wierzbicka, A. 1991. Cross-cultural pragmatics: the semantics of human interaction. Berlin: Mouton de Gruyter.

吉村あき子　1998.『否定極性現象』東京：英宝社.

Zanuttini, R. and P. Portner. 2003. Exclamative clauses: at the syntax-semantics interface. Language 79, 39-81.